

ユネスコ本部, AFU(フランス語圏大学連合局)

フランス文部省ユネスコ委員会, ボルドー第3大学

岩手大学工学部准教授

南 正昭

はじめに

本報告書は、ESDを取り巻く近年の動向について、フランスの関連機関を訪問し情報の収集を行った成果をまとめたものである。訪問先は、ESDの所管部局であるユネスコ本部、フランス語圏の大学間のネットワーク化を進めているAFU(フランス語圏大学連合局)、フランスのESD特別委員会の事務局であるフランス文部省ユネスコ委員会、ユネスコ講座をもつESDボルドー第3大学である。2006年12月4日～14日に、岩手大学教員4名で聞き取り調査を行った。

調査においては、各機関がESDに果たしている役割、取り組みの内容、ESDを進める上で留意点等についての助言をいただいた。以下は、その要旨をまとめたものである。

訪問調査担当者

南 正昭 工学部建設環境工学科准教授

後藤尚人 人文社会科学部国際文化課程准教授・大学教育総合センター教育評価・改善部門部門長

江本理恵 大学教育総合センター講師

Bougon, Patrice 人文社会科学部国際文化課程准教授

1) 訪問先： ユネスコ本部

担当者： Bernard Combes

(ESD 文献・情報担当専門員)

訪問日時：12月07日（木）10時～12時

- ・ユネスコは、国連のESDに関わる事業を委託されて行っているものである。
- ・担当は4人、アシスタント1人、合計5人で対応している。
- ・文化、コミュニケーションなど4つのセクションが用意されている。
- ・たとえば太陽電池のプロジェクトがあるとすると、そのプロジェクトを起こすときに、その分野を専門の人たちに振り分けをする仕事をしている。
- ・担当者には、専門家はない。大学等からのオファーにより、専門家の紹介をする仕事をしている。
- ・国によっては、直接ではなく、その国のユネスコを通してオファーが届く。



- ・日本の委員会は、文科省、環境省など複数の省庁が関与しており、考え方にそれぞれの特徴がある。世界遺産には、熱心な印象がある。
- ・ユネスコでは、環境系の事業は既に存在していたので、ESD を重ねてはじめることを調整するのが難しいところだった。
- ・ESD の国際的な枠組みを説明した文書として、“Implementation scheme” があり、参考になると思われる。
- ・実施しようとするところの、それぞれの特質に合わせた取り組みをやっている。教育面、リーダーシップ、メディアへの広報などである。名古屋の愛地球博にも参加した。
- ・岩手大学としての特質に合わせた取り組みをやつたらどうか。
- ・それぞれの国でやっているが、日本は国レベルで取り組みを決めており、WWW で公表されている。それに沿った位置づけをつくればいいのではないか。
- ・行動計画を作ることはできるが、学校で実施するには、費用の調達が難しい。
- ・教員の教育プログラムができればよいと考える。
- ・計画には、漠としたものや、詳細なものまで、いろいろなものがみられる。ESD は、一人ではできないので、チームを組んでやらなければならない。柔軟性を持ったプログラムでないとうまくいかないだろう。
- ・パリ郊外で行っている私自身の環境問題に関する取り組みとして、市町村などの自治体が小学校と連携してごみの捨て方について行っているものがある。家に帰って話しをすることで効果がみられる。
- ・教員、学生、電気技師、配管工など、学校に関わるすべての人が理解しておく必要がある。子供の権利に関する事をやっていたときの経験として、ある場所でよくても別の場所でだめなら、全体としてだめになる。広くすべての人が理解しておくことが必要である。
- ・いろいろな大学で、様々な取り組みを始めているが、実際にどうやつたらいいかまだわかつてはいないので、情報交換のネットワークがある。情報交換をするには、エネルギー、社会的権利など“特殊性”がはっきりしているといい。
- ・当該部局の予算は、5万ユーロである。
- ・大きな取り組みで、あまりにあいまいになると、うまくいかない。最初はいいが、段々とだめになる傾向がみられる。“特殊性”がある方が力を合わせられる。
- ・大学のなかでやるときは、教え方を工夫した方がよい。チームを組んでやる方がよいだろう。
- ・フランスで ESD をやっているところとしては、ボルドーでやっている。パリでもまだあまりうまくいっていない。卒論・修論のため学生から直接尋ねられことがあるが、漠然としていて答えようがない。
- ・ESD の CD-ROM は 300 人で 2 年間かけて作成した。最後の 1 章はストーリーテリングなど教育方法に関する事を述べている。ドイツの最近の試みにあるように環境保全やマルチメディアなどの力を合わせて協同してやることが大切である。様々な分野のことが第 2・3 章に書かれている。この CD は、教員や学生などへ多用な使い方ができる。しかし、これは 1 年間でやれるほど、簡単な内容ではない。
- ・カナダのヨーク大学は、ESD 教育に関するユネスコ講座を持っている。
- ・ユネスコは、大学間のネットワークづくりなどにおいて、どれがいいかの判断はできない。例示することはできる。
- ・小学校から大学まで、教育委員会や文科省な

ど管轄が異なるが、統一性をもって ESD に取り組める仕組みづくりなどが課題になっている。

- ・「Guidelines and recommendations for ...」は2月に新しいものが出版される予定である。ジャマイカ、メキシコ、日本などの事例が載っている。
- ・国連大学に鈴木教授がいる。かわべ教授は、子供向けプログラムを開発し、企業も社員教育に採用している。どれだけ水や電気を使っているか、どれだけ減らせたかなど、簡単なものだが、子供だけに閉じないことが大切だ。
- ・企業は、エネルギーの儉約のために、社員にそのプログラムを教える。大学でたとえば、数学の先生に ESD といつてもわからないから、企業→子供向け→親といったこの例のように、まわりまわっての方法というのもできる。
- ・ユネスコが手助けするとき、知っている人に聞くなどし、やり方を変えることを考える方がいい。まったく違った人の意見を聞くなどもいい。タイにいるイギリス人で、大学経営に関する本を書いている人がおり参考になるかもしれない。
- ・ソルボンヌ大学などユネスコ講座への取り組みは、岡山大学、スエーデンの大学などでやっている。
- ・「Framework for UNDESD International Implementation scheme」はこれから 8 年間のことについてまとめており、日本語にも訳されている。
- ・日本の NGO 責任者の名前を教えることはできる。
- ・パシフィック(バンコク、北京など)の支部に連絡をすることも可能である。

2) 訪問先： AFU 「フランス語圏大学連合局」(仮訳)

担当者： Michele Gendreau-Massaloux
(局長)

訪問日時：12月07日（木）15時～16時

- ・ここでは、フランス語で話す研究者のネットワークを作っている。
- ・研究者のネットワークや情報をもっている。また10ぐらいのプログラムをもっている。
- ・カナダ、ベルギー、スイス、モロッコなどの大学のプログラムの責任者とコンタクトを取ることができる。
- ・それぞれの国の考え方、研究者の考え方を交換することが目的で、押し付けることではない。
- ・メンバーになった場合、旅費の支給も含めて協力することは可能である。
- ・ESD だけではなく、水に関するここと、リモートセンシングを用いた汚染のモニタリングなどのプログラムもある。
- ・2004年のときに作った文献を渡します。研究者ネットワークに登録すれば、情報にアクセスできます。このネットワークに参加し、次はオブザーバーとしてやってきたらいいでしょう。

3) 訪問先：フランスの文部省ユネスコ委員会

担当者：Janine d'Artois (広報・部門間活動担当官)

訪問日時：12月08日（金）11時～12時

- ・ESD の取り組みははじまったばかりで、ボルドー大学で行っている。
- ・フランス教育委員会が担当している、ESD 特別委員会が設置された。
- ・この特別委員会の委員長は、ビガール氏で大

学の先生である。彼に会うのがいいだろう。
ここは事務局である。

- ・環境省、農水省、外務省、文科省、文化省も関わっている、いくつかの省が ESD の委員会をもっている。
- ・この特別委員会は、いくつもの地方の委員会などのすべてを統合する役割をしている。
- ・この特別委員会には、私企業の銀行、電気会社などが出資している。ベルサイユ大学やボルドー大学(ビガール氏)などの公共の組織、
21 委員会、ジャーナリストなどの大学や市民も関わっている。また WWF も関わっている。
- ・いろんな団体や大学を統合する役割をしている。農水省、環境省、外務省、文科省、文化省も参加している。
- ・ユネスコは各国に支部を持っている。全部で 200 人ぐらいいる。科学、文化、人種などの部門からなっている。
- ・この特別委員会の役割は、ユネスコの計画を実施すること、またフランスの取り組みをユネスコに伝えることである。
- ・2006 年 6 月 16 日に、ユネスコで、ESD の先進的な取り組みに関する国際的なシンポジウムを行い、世界から 700 人が参加した。このシンポで 12 のプランが出された。
- ・このシンポで高等教育に関するアトリエと呼ばれるワークショップが行われた。その委員会の報告書は現在準備中でもうすぐ完成の予定である。
- ・ユネスコは高等教育以外にも中等教育等で 40 数カ国のネットワークをもっている。
- ・あらゆる領域のことをまとめていくことが大切である。初等から高等教育、公機関から私企業まで、総合化していくことが大切である。
- ・委員会の委員長ビガール氏（ボルドー大学）



- は、首相から任命されている。
- ・仙台にあるユネスコクラブは、世界で最初のものである。

4) 訪問先： ボルドー第 3 大学

担当者： Alain Escadafal (国土・観光・都市計画センター：観光教育部門長)

訪問日時：12月11日（月）13時30分～14時30分

- ・30 年前からこのセンターはある。地理学の派生として都市論、ツーリズムができた。
- ・これら 2 つの分野は、フランスの学問分野として、もともと分かれていた。フランスでは国土の分割に関することは重要で、職業上の必要からこの研究所はスタートした。
- ・フランスだけなく、ヨーロッパ全体として、地域の発展に関するることは重要視されている。
- ・SD に関する経済、環境などは、SD と呼ばれる名前がある前からずっとやっていた。
- ・地域の発展のプロジェクトとして、修士課程ができた。職業用のコースもできた。

- ・少し前から、ヨーロッパ全体の統合（EU 連合）がはじまり、アメリカのような進級制度がてきた.
- ・ここでは、もともと 3 年間のカリキュラムとして、都市論とツーリズムがあり、それに加えて、3 年目対象のプログラムとして ESD がある。学際的なプログラムが組まれている。
- ・教え方の重要なポイントとして、プログラムが 100 としたら、半分の 50 が地域の人によつて教えられている。実際に職業をもつている人の話を直接教わる。またインターンシップも行つてはいる。その前の段階としてワークショップをやつてはいる。
- ・外部から教える人が 100 人ぐらいきてはいる。ツーリズムだけで 21 人いる。License Profession のコースでは 4 分の 1 は外部から雇わなければならぬ決まりがある。ここはもっと多くなつてはいる。たとえば、ボルドーの国土省の人をよぶと、スタッフとのコンタクトが保てるなどのメリットがある。
- ・講義内容は、フランス文科省が決め、4 年に 1 回のチェックがある。ここでは 20 年前から地域の人と教員が話し合いをもつてはいる。半分ぐらいがこの卒業生であり、だれが何をしてはいるのか、大学の要求もわかつており、互いに了解してはいる。
- ・講義では前もっての計画に従うばかりではなく、その時々の時事問題を取り上げてはいる。3 年前に海の異常現象が発生したことを教材として取り上げた。
- ・ツーリズムについて、フランスでは、地域の発展のための観光、国土保全などに一定の権限が与えられている。
- ・毎年一人ぐらいは留学生が来ている。方法論は世界に通用するものだからである。
- ・ツーリズムの方は、バンコクと協定を結んではいる。都市論の方は、海外との協定が多い。
- ・方法論とは、6 ヶ月間ずっとグループで学習するワークショップ方式で、学生が自分たちで学んでいくやり方である。
- ・講義と演習があり、講義を実際問題に適用する。たとえば、客の要求に対して、学生が対応するときに、学生を助けるだけで、解決策を指示しない。学生が見出すように手助けをするだけである。
- ・SD だけではあまり意味がない。実際の職業についたときのことを考える必要がある。都市論のことをやろうとすれば、まず都市論の専門家でなければならない。
- ・ここに最終的には 25 人が入る。倍率は 10 倍程度である。入試は行ってはいる。書類選考で 4 から 5 倍に絞る。さらに面接で 25 人に絞る。
- ・評価方法は、ワークショップ方式の方はグループで成績を出す。その他は、個人で評価するものもある。研修レポート(修士論文)は個人で提出する。
- ・アジェンダ 21、ESD 行動計画では、我々と同じように地域の自治体を重視している。経済、環境、社会、文化などを重視している。
- ・たとえば木の輸入について、インドネシアでは伐採のされ方をオープンにして金額を決



めている。現在は、住民が反対したら実施できない。

5) 訪問先：ボルドー第3大学

担当者：Annie Najim（国際交流センタ
ー：持続可能な開発専門職ユネ
スコ講座教授）

訪問日時：12月12日(火)9時～10時30分

- ・この大学でのESDの目的は、国際関係の仕事ができる人材育成においている。
- ・直接、海外に行くということばかりではなく、国際関係の仕事につくことである。
- ・ここのESDでは、南北関係に重点をおいており、南半球の国を対象としている。
- ・ここでやっている授業の3分の1は、専門家による授業である。
- ・まず6ヶ月間授業をし、1週間に何度か社会に入って実習をする。その後4ヶ月間南の国の現地に出て行く。その4ヶ月間、実際の作業にかかり、実行できる力を養う。アフリカ、フィリピン、ベトナムなどへ行っている。
- ・学生を25人から30人ぐらい受け入れている。250人から300人の応募があり、セレクションと成績評価は、大学人と専門家で行っているのが特徴である。最低でも大学人1人、専門家1人のペアで行っている。
- ・フランスのESD教育の特徴は、大学の中だけでなく、専門家との連携・連合体をつくって行っていることである。
- ・最初は、学生たちに現場で考えさせる。たとえば土壤について、その特性、技術的方法、開発予算など、トータルで扱っている。
- ・それに加えてESDの歴史、思想なども教えている。
- ・実務ばかりでなく、理論も教えている。

- ・専門となる実践的教育をしっかりとやっている。一方でジェネラリストとしての教育をやっている。
- ・海外へ行くときのタイアップは、NGOとの連携で行っている。
- ・ずっと前からこの大学で行ってきたことのなかで、ある学生の取り組みがユネスコの方の目にとまり、ユネスコ講座をつくるきっかけとなった。ユネスコからオファーがあり、最終的にはユネスコと学長との協定により始められた。
- ・ユネスコがやっているのは、モラルに関することが多い。予算的にはあまりない。これまで評価の低かったこの講座が、ユネスコ講座になることにより評価が上がったことが大きかった。
- ・国際会議を行ったときには予算を出してくれるが、そのほかは特にない。
- ・現在は、国レベルでESD教育が規定されるところまでは至っていない。取り組みが始まっている。
- ・ボルドー大学の他大学との連携としては、モロッコ大学など南の大学、スペインなどヨーロッパの大学などがある。
- ・ジュネーブにIUUDという組織があり、ESDについてより進んだ取り組みをやっているの



- で、参考になるだろう。
- ・岩手大学とは、これが最初のコンタクトとなる。

収集文献リスト（英語文献）

- 1) UNESCO Education Sector : International Implementation Scheme, 2005.
- 2) UNESCO Education Sector : Framework for the UNDESD International Implementation Scheme, 2006.
- 3) UNESCO Education Sector : Guidelines and Recommendations for Reorienting Teacher Education to Address Sustainability, 2005.
- 4) UNESCO : Teaching and learning for a sustainable future, 2005.
- 5) French National Commission for UNESCO : Winds of change in the teaching profession, 2001.
- 6) UNESCO Bangkok : A Situational Analysis of Education for Sustainable Development in the Asia-Pacific Region, 2005.
- 7) UNESCO Bangkok : Working Paper: Asia-Pacific Regional Strategy for Education for Sustainable Development, 2005.
- 8) ArTech : Kids' ISO 14000 Introductory Level
- 9) AUF : FUA/AUF The French Speaking University Agency



2006年12月20日